

作業の経過

実際の作業にあたっては、金丸教授を委員長として主任会メンバーをもって構成する編集委員会の責任のもとに内容構成を企画し、各種常置委員会に適宜分担執筆を依頼する形式をとった。客観資料の収集整理には事務職員特に高光庶務係長の応援による部分が多い。他大学との比較資料が殆ど得られないことが、今回の作業の大きな欠点であるが、代わって八大学工学部長懇談会が公表した『未来を拓く工学教育』（一九九一年三月）の中の図、表を利用できたことは救いであった。

記録の評価

さて、でき上がった『十周年記念 自己点検記録』の内容が果して上述したような攻撃型になっているかと問われると、残念ながら……と答えることになる。矢張り、十周年記念誌を標榜した以上、年内には完了しなくてはならぬ、その時間的制約が大きすぎた。採り上げなかった検討項目も多くあろうし、折角集めた資料が使われなかったものもある。分析検討の不足不徹底も散見され、これがため、有効な主張になっていないように思える。今回の経験は、次回に必ず活かすことができるだろう。

勿論積極的に評価できる面は多々ある。提示された多くの資料は構成員個々の人々にとつて、初めて知る情報であることも多いと思わ

れるし、改めて自覚を喚起して貰えることもある筈である。与えられたデータをどう読むかは、個人の識見と力量の問題でもあるから、軽率な分析やそれに基づく主張は最小限の方が良いとの見方もあろう。いずれにせよ、今回の作業は試金石である。学内外諸賢からの批判や意見を求めるためのものである。他学部他大学から同様な資料公開が行われることを期待する。

自己点検のもう一つの目的

今回の点検目的は、第三者への資料提供においた。実はもう一つある筈である。大学審あたりが要求しているのは、どちらかと言えども一つの方なのだろう。点検をする機関や組織は、その目的理念を明確にし、その理念に沿う方向で活動しているかを点検するこ

とになっている。以下は純粹に私見だが、工学部の目的や理念と言われても、私などには何を考えてよいか判らない。余りに明々白々で、無理に作文してみたところで、内容に乏しく白々しいものしか私の頭には浮かばないからだ。

大学審の偉い先生方が、理念と言うコトバで表現したいのは、実は予測なのだろう。それなら私にも判る。近未来の工学はどうなるか、まずその予測を樹て、その方向に沿って工学の教育研究のあり方を点検せよと言っているのだろう。実はこの事は、岡山でも陳べたし、工学部内でも組織見直し委員会の席上で予測の作業をすることを提案した。結果は小生の不手際から捻りあることにはならなかったが、少なくとも工学分野では未来予測は或る程度可能な筈だし、必須であるように思う。紙幅もつきた。アテブレーベ、オブリガード。

広島大学工学部と

アメリカ合衆国クレムソン大学工学部の

交流事業がスタート

一九九二年度は両大学の学部学生二名と教官一名の交換滞在が決定。

工学部 原動機工学講座 西田 恵 哉

広島大学工学部はアメリカ合衆国クレムソン大学工学部と学部間国際交流協定を結び、交流事業を一九九二年度より開始した。開始に至るまでの経緯、クレムソン大学の概要、今後の交流計画について報告する。

クレムソン大学から 交流の申し入れ

一九九〇年七月、広島大学工学部第一類（機械系）機械材料工学講座は、アメリカ合衆国サウスカロライナ州立クレムソン大学から、（助）浦上育英会の資金援助による交流の申し入れを受けた。浦上育英会は、広島県府中市に本社があるリョービ（株）が運営している育英会であり、リョービはクレムソン大学近郊に二つの工場を所有している。

この交流計画は、クレムソン大学が日本の大学との交流を希望し、リョービがクレムソン大学に対して交流資金の援助を申し出たことに始まる。資金援助の窓口である浦上育英会が広島県の育英会であるので、他県に活動を広げられないという理由と、リョービの技

術部門と機械材料工学講座との間に、研究面での交流があったという経緯で、クレムソン大学から機械材料工学講座に交流の申し入れがあったわけである。

相互訪問を経て 協定書調印へ

これに対して、機械材料工学講座で討議を重ねた結果、第一類（機械系）全体で検討することになり、さらに両大学の教官が相互に訪問して、情報収集と意見交換を行うことになった。

一九九一年一月三日から一月二十八日まで、クレムソン大学工学部機械工学科のハリー・ロー教授が本学部を訪問し、また一九九一年一月二〇日から一四日まで、機械材料工学講座の柳沢教授と原動機工学講座の西田（筆者）がクレムソン大学を訪問して、交流計画に関する意見交換を重ねた。その結果、クレムソン大学の当面の意向は、交流の専門分野を材料、生産、電子・コンピュータ関係に限定しているが、将来は工学部全体に広げ、建築学部も加えたいとしているので、学部間協定を締結することが妥当であろうという結論に達した。

これを受けて浦上育英会と協議し、一九九二年三月二七日に協定書の調印式と祝賀パーティーを行った。調印式には、クレムソン大学側から学長補佐ウェイン・ベネット教授夫妻が出席し、工学部長の佐々木和夫教



調印式後のパーティで、左から浦上理事長、交換学生の植野君（二年）、佐々木工学部長、交換学生の横山君（四年）、ベネット学長補佐。

授、浦上育英会理事長の浦上浩氏の三者が協定書に調印した。

クレムソン大学の概要

クレムソン大学は、最近、多くの日本企業が進出しているアメリカ南部の中心大学の一つである。九学部（農学部、建築学部、商工業学部、教育学部、工学部、森林環境学部、教養学部、看護学部、理学部）からなり、学生（含大学院生）一六、三〇三人、教官一、一四八人（いずれも一九九〇年秋季 semester のデータ）を擁する総合大学である。



協定書に調印する、左から佐々木工学部長、ベネット学長補佐、浦上理事長。

創立は一八八〇年で、農学および機械工学の両コースを持つ単科大学として出発した。このため農学部および工学部は長い歴史を持ち、アメリカ南部における農業および工業関係の研究、教育の拠点となっている。

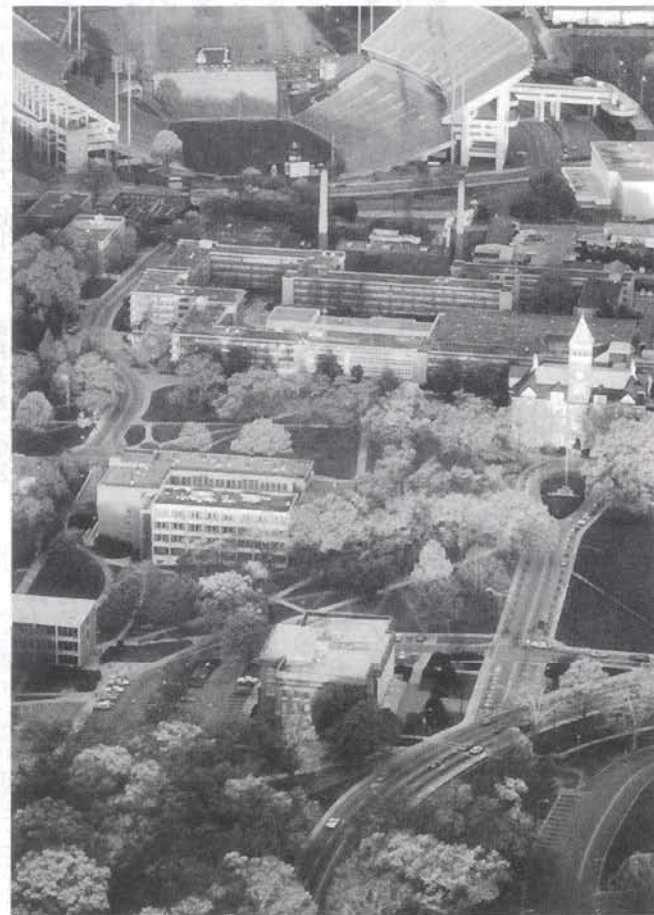
工学部と建築学部

工学部は学生数（含大学院生）が三、七八一人（一九九〇年秋季セメスタ）で、商工業学部について二番目の規模である。九学科（農業工学科、生物工学科、セラミック工学科、化学工学科、土木工学科、電気・コンピュータ工学科、環境システム工学科、生産管理工学科、機械工学科）と九つの研究センター等からなっている。工学部とは別組織の建築学部は四学科（建築学科、建築術学科、芸術・歴史学科、計画学科）からなる。

交流事業

協定書に記載した交流事業の内容は以下の通りである。

- (一) 学部学生及び大学院学生の交流
 - (二) 教官及び職員との交流
 - (三) 共同研究、合同会議及びセミナーの実施
 - (四) 学術、教育に関する情報交換
- これらの事業は両学部で個別に協議し、双方の合意と資金援助に関する浦上育英会の了



クレムソン大学キャンパス。右手中央の塔はビジターセンター（ティルマン・ホール）、左奥は巨大なフットボールスタジアム。

承を得て、実施していくことになる。また両学部部に設置した交流委員会（本学部では当第一類（機械系）内に設置）が実施のための調整を行う。

交流計画

当初の交流は、クレムソン大学工学部の各学科のうち機械工学科、電気・コンピュータ工学科および生産管理工学科と、本学部第一類（機械系）との間で開始する。一九九二年度は次のような交流を予定しており、実施に向けて準備を進めている。また渡航や滞在などに必要な経費は、浦上育英会に負担していただくことになっている。

(一) 学部学生の交換滞在（約三週間）

サマーコースか聴講制度への参加
大学周辺の企業見学
研究室活動への参加

(二) 教官の交換滞在（約二週間）

大学院学生対象のセミナーの実施
専門研究についてのディスカッション
共同研究の可能性等の話し合い

おわりに

約二年の月日を費やして、ようやく交流がスタートした。当初から交流事業実現のため努力された財浦上育英会、リョービ㈱、クレムソン大学、広島大学の関係者の方々にお礼申し上げます。